

さっぱり・まるっきり

秋 山 俊 広

1. はじめに

(1) 先生の言うことが私には さっぱり 分らない。

(2) 先生の言うことが私には まるっきり 分らない。

上の(1)、(2)はいずれも、「先生の言うこと」を「私」が全く理解できないということを表している。ところが一方、「さっぱり」「まるっきり」の両語には次のような用法の違いもみられる。

(3) いつまで待っても彼は さっぱり 現れなかった。

(4)[×] いつまで待っても彼は まるっきり 現れなかった。

(5)[×] 時計をにらむ叔父の表情は平常の顔とは さっぱり 違っていた。

(6) 時計をにらむ叔父の表情は平常の顔とは まるっきり 違っていた。

本稿では、「さっぱり」「まるっきり」の両語について、それぞれ使用可能な条件を考えることによって意味用法の差を考察していく。

なお、「さっぱり」には、「過去の失敗はきれいさっぱりと忘れて、出直そう。」「言いたいことを残らず言ってしまったら、気持ちがさっぱりした。」(いずれも林史典他編1986『国語基本用例辞典』。以下『用例』と略す)のように「～と」「～する」の形で用いられる用法があるが、これは本稿での直接の分析の対象とはしない。

2. 先行研究及び辞書での記述

「さっぱり」「まるっきり」について新村出編1983『広辞苑第三版』では、それぞれ以下のように記述している。

さっぱり〔名・副〕④まったく。まるで。(多くは下に打ち消しの語を伴うが、「一だ」の形で「全然だめだ」の意にも用いる)「一分らない」「景気は一だ」

まるっきり〔丸切〕〔副〕マルキリの促音化。

まるきり〔丸切〕〔副〕すべて。全く。まるっきり。

また、山田忠雄他編1981『新明解国語辞典第三版』では次のように記述している。

さっぱり (副) ㊦㊧ その事に関して、いかなる意味においても望ましい状況が実現しない状態にあることを表わす。「仕事が一手につかない・景気はどうです? いやーです」

まるっきり〔丸っきり〕(副)〔「丸切り」の強調形〕否定的な状態が、全面にわたっていることを表わす。全然。〔二者択一的な事態しか有り得ないような文脈の中での「Aではない」という場合には使わない〕「田舎から出て来て―〔＝一度も〕帰っていない・あの人の本は―〔＝本と名の付くいかなるものも〕出版されなかった・何年練習しても―うまくならない：―だめ(不親切・無能)だ：期待を―裏切った」

『広辞苑』の記述は、単に他の語で言い換えただけに過ぎず、本稿で目指す意味の記述とはかけはなれたものと言わざるをえない。一方、『新明解』はその点でよく説明されていると言えるが、具体的な意味記述の内容については本稿の中で再検討していく。

また、森田1977では、「さっぱり」について曰(否定形または否定的な語に係る場合)として、「当人の側にない事柄が、当人側に全く現れ出ようとしないさま」「当人が、その事物・状態の出現を希望し期待しているにもかかわらず、全然出現・生起しない状態」と記述している。そして「まるっきり」については、「まるきり」の項を見ると「『まるきり』は『まる・きり』で、『まる』が欠けたところのない状態であるところから、『完全』を意味し、『きり』と結び付いて、“百パーセントだめ”という状態を表す。不可能な気持ちを伴う」と記述している。「まるきり」について言えば、「まる」から「完全」への結びつけ方がやや安易な印象を受ける。そこで本稿において語の成り立ち等にとらわれず、様々な用法から意味を記述していくことは、十分意義のあることと考えられる。

3. 分 析

3.1. 事態の不生起

(7) いつまで待っても彼は さっぱり 現れなかった。〔＝(3)〕

(8)[×] いつまで待っても彼は まるっきり 現れなかった。〔＝(4)〕

「彼」が現れるかどうかということには、現れる場合と現れない場合の二通りの結果しかなく、「少ししか現れない」等の「程度」は想定し得ない。(8)が非文となるのは、「まるっきり」が「程度の幅」の想定を前提としているからである。したがって、次のような場合には適格である。

(9) いつまで待っても彼等は まるっきり 現れなかった。

(10) 何度待ち合わせをしても彼は まるっきり 現れなかった。

(9)(10)ではそれぞれ人数、回数という形で「程度の幅」が想定できるため、「まるっ

きり」が適格となるのである。(9)では、「誰も現れない、一人現れる、二人現れる、……全員が現れる」という幅の中で、誰も現れなかったことを表し、(10)では、「一度も現れない、一度現れる、二度現れる、……毎度現れる」という幅の中で、一度も現れなかったことを表すのである。

一方、(7)が適格であるということは、「さっぱり」が程度の幅を前提とする語ではないということを示している。「さっぱり」が表しているのは、程度ではなくて、描き手が「彼が現れる」という事態を期待している、ということであり、その事態が生起しない、ということである。

(11) 一刻も早く会いたい彼が さっぱり 現れない。

(12)[×] もう二度と会いたくない彼が さっぱり 現れない。

(12)は、「もう二度と会いたくない彼が現れる」ことを期待して待っていることを表すため、特殊な文脈がないかぎり非文となる。

「現れる」以外の動詞についても同様のことが言える。

(13) 先生の言うことが私には さっぱり 分からない。 [= (1)]

(14) 先生の言うことが私には まるっきり 分からない。 [= (2)]

(15) 車は故障したらしく さっぱり 動かない。

(16) 車は故障したらしく まるっきり 動かない。

(13)、(14)、(15)、(16)はいずれも自然な文であるが、それぞれ「さっぱり」「まるっきり」のニュアンスの違いが反映している。「さっぱり」を用いている(13)および(15)では、「分かる」「動く」という期待される事態が生起しないことを表し、「まるっきり」を用いている(14)および(16)では、それぞれ表されている「分からない」「動かない」という否定的状態が、それぞれ想定される「程度の幅」の中で最大の極にあるということを表す。このことは次の例によっても分かる。

(17)[?] この車は さっぱり 故障しない。

(18) 壊れてしまえば買い替えられるのにこの車は さっぱり 故障しない。

(19) 斬られ役の男はすでに斬られているのに さっぱり 死なない。

(20)[×] 斬られ役の男はすでに斬られているのに まるっきり 死なない。

(17)、(18)を比較すると(18)がより自然であると感じられるが、それは(18)では「故障する」ことを積極的に期待している、ということが文脈によって明らかに示されているからである。これに対して(17)の場合、そうした文脈が特に表されていないため聞き手によって判断が揺れるのである。(20)は、「死なない」という事態に「少ししか死なない」などの「程度の幅」が想定できないため非文となる。

なお、「さっぱり」の「期待」ということに関して言えば、次のように必ずしも描き手が期待していない場合にも適格である。

(21) 毎日催促にきていた借金取りが今日は さっぱり 姿を見せない。

(21)は、特に描き手が「借金取り」が現れることを期待しているという読み込みを行わなくとも適格である。(21)で描き手が行っているのは、「借金取り」が現れるという予期・予測である。「期待」とは、「予期・予測」される事態に対してプラスの評価が与えられたものであり、つまり「予期・予測」は「期待」の上位概念である。したがって、「さっぱり」を期待される事態が生起しない様子を表すとするのは意味範囲を限定し過ぎており、予期・予測される事態が生起しない様子を表す、とする。

また、森田1977では、「まるっきり」について「不可能意識を伴うので、自然現象など非情の事態には使わない」として次のような例を「おかしい」としている。

(22) 春になっても まるっきり 暖かにならない。

(22)は筆者の語感ではごく自然なのであるが、次の(23)と比較するとやや不自然だと感じる人もいるようである。

(23) 春になっても さっぱり 暖かにならない。

しかし、こうしたことは、「まるっきり」が不可能意識を伴うからといった理由からではなく、すでに述べた「程度の幅」が想定しうるかどうかという点から説明される。つまり、「暖かくなる」という事態を、暖かくなるかならないかという二者択一的なものとしてとらえるか、「非常に暖かくなる」「少し暖かくなる」というように「程度の幅」のあるものとしてとらえるかによって、(22)の判定は揺れるのである。「まるっきり」に「不可能意識」という特徴が認められないことは、次の例から明らかである。

(24) 時計をにらむ叔父の表情は平常の顔とは まるっきり 違っていた。

[=(6)]

3.2. 状態の否定

3.1では、ある事態が生起しない場合についての用法を見てきたが、ここでは、ある状態にないということを表す場合について考える。

(25) この料理は さっぱり おいしくない。

(26) この料理は まるっきり おいしくない。

(27)? 沖縄の空に比べると東京の空は さっぱり 青くない。

(28)? 沖縄の空に比べると東京の空は まるっきり 青くない。

(29)[×] トナカイと違ってシカのメスには さっぱり 角がない。

(30)[?] トナカイと違ってシカのメスには まるっきり 角がない。

(25)~(30)の各例文の間には、その適格度において多少の違いがみられる。

「さっぱり」を用いた(25)、(27)、(29)の間にみられる適格度の違いは3.1で述べた「さっぱり」の「予期・予測される事態が生起しない様子を表す」という意味特徴によっている。つまり、「おいしい」「青い」「角がある」という「状態」を生起する「事態」としてとらえられるかどうかという違いが、文としての適格度の違いとして表れるのである。(25)について言えば、「おいしい」ということは、実際にその料理を食べた者が、食べたその時に行う判断によってはじめて決まるという点で、食べた瞬間に生起する「事態」としてとらえうる。そのため適格な文となる。これに対して「角がある」ということは、シカを見る者の判断の入り込む余地のない恒常的な状態であり、いかなる意味においても、生起する「事態」としてとらえることはできない。そのため(29)は非文となる。(27)は、「青い」ということが、空を見てはじめて行われる判断とも、見る者とは無関係な恒常的な状態とも、いずれともとらえられるため判定の揺れるところである。

(26)、(28)、(30)の間の適格度の違いは、「まるっきり」の「程度の幅」を前提とする、というところから説明される。「おいしい」ということには、「少しおいしい」「かなりおいしい」などの「程度の幅」が想定できるのに対して、「青い」「角がある」ということには、「少し青い」「かなり角がある」などの程度の幅が想定しにくいから、(28)、(30)は不自然な文となるのである。

3.3. 否定的事態・否定的状態

「さっぱり」「まるっきり」には、否定の「～ない」を伴わず、肯定形で否定的意味を表す語と共起する用法がある。

(31)^x 時計をにらむ叔父の表情は平常の顔とは さっぱり 違っていた。
[=(5)]

(32) 時計をにらむ叔父の表情は平常の顔とは まるっきり 違っていた。
[=(6)]

(33)^x 彼の教えてくれたとおりに行くと さっぱり 反対の方角に出た。

(34) 彼の教えてくれたとおりに行くと まるっきり 反対の方角に出た。

(35)^x 彼は我々の期待を さっぱり 裏切った。

(36) 彼は我々の期待を まるっきり 裏切った。

これまで見てきたように、「さっぱり」は「～ない」を伴って「予期・予測される

事態が生起しない」という意味を表すのであって、(31)、(33)、(35)のように肯定形とは共起しない。これに対して、「まるっきり」は、「違っていた」「反対」「裏切った」などの否定的状態および否定的事態を、何らかの程度の幅のあるものとしてとらえ、その最大の極にあることを表している。

また、次のような例もある。

(37) 今度の中間テストは さっぱり だめだった。

(38) 今度の中間テストは まるっきり だめだった。

(39) このごろは景気がさっぱりだから、今度のボーナスも少ないだろう。

(『用例』)

(40)? このごろは景気が まるっきりだから 今度のボーナスも少ないだろう。

(41)^x 太郎の答案と次郎の答案が さっぱり 同じだ。

(40) 太郎の答案と次郎の答案が まるっきり 同じだ。

(37)、(39)はいずれも自然な文であるが、(37)は「だめ」という語が「予期・予測される事態が生起しない」ということを意味するためであり、(39)は「さっぱり」のそうした意味の拡大されたものと考えられる。一方「まるっきり」は「まるっきりだ」という用法があまり熟していない。また、(42)のように否定的意味を表さない語の肯定形と共起する例もあるが、これは「程度の幅の中で最大の極にある」という「まるっきり」の用法の拡大されたもので、用法としては少ないものである。

3.4. その他の「さっぱり」の用法

本稿で分析の対象から除外した次のような「さっぱり」の用法について簡単に触れておく。

(42) 過去の失敗はきれいさっぱりと忘れて、出直そう。(『用例』)

(43) 言いたいことを残らず言ってしまったら、気持ちがさっぱりした。(『用例』)

『新明解国語辞典第三版』によると、このような「さっぱり」の意味を、「(後に残る)不快感やわだかまりやごたごたした余計なものがほとんど感じられない様子」と記述しているが、本稿で分析した意味との共通点は、「非存在」ということである。否定形と結び付く場合は生起すると予期・予測される事態が、肯定形と結び付く場合はないことが望ましいものが、それぞれ存在しないことを表す、と言えようか。いずれにせよ、この「非存在」ということが「さっぱり」の中心的意味であろう。

4. まとめ

以上の分析により、「さっぱり」「まるっきり」の意味をそれぞれつぎのようにまとめる。

「さっぱり」予期・予測される事態が、生起しない様子。

「まるっきり」程度において幅をもちうるある否定的な状態（または事態）がその最大の極にある様子。

／参考文献／

森田良行1977『基礎日本語 1』角川書店

山田忠雄他編1981『新明解国語辞典第三版』三省堂

新村出編1983『広辞苑第三版』岩波書店

林史典他編1986『国語基本用例辞典』教育社

言語経歴：1967年10月 宮城県仙台市生まれ

0歳～4歳 仙台市

4歳～5歳 宮城県岩沼市

5歳 栃木県宇都宮市

5歳～7歳 神奈川県横浜市

7歳～9歳 千葉県木更津市

9歳～10歳 東京都練馬区

10歳～12歳 群馬県多野郡新町

12歳～13歳 茨城県猿島郡総和町

13歳～16歳 東京都練馬区

16歳～ 神奈川県横浜市

（あきやま としひろ・東京都立大学大学院学生）